

地域を結ぶ へんろ文化



まず、この「四国へんろ道文化」世界遺産化の会は、1997年にえひめ地域づくり研究会の仲間と一緒に、この運動をはじめ、みなさんがそれぞれの立場でそれぞれの仲間とともにやっています。

発足から10年、地道な活動を通して世界遺産登録運動を進めてきた「四国へんろ道文化」世界遺産化の会。昨年末には、世界文化遺産暫定リスト追加候補として四国4県が「四国八十八箇所霊場と遍路道」を共同提案するなど、今その活動が大きな展開を見せはじめている。

「いまなぜ遍路道なのか」
今回「四国へんろ道文化」世界遺産化の会代表世話人で四国霊場五十八番札所仙遊寺の住職小山田憲正氏に遺産化の会の取り組みと四国、そして地域に根ざすへんろ文化について聞いた。

★世界遺産に向けての機運が高まっていますが。

まず、この「四国へんろ道文化」世界遺産化の会は、1997年にえひめ地域づくり研究会

悩んだら 四国に来なさいや



「四国へんろ道文化」世界遺産化の会
代表・世話人 小山田憲正

ただどこかの強力な組織が腕力で成し遂げてとかいうことが無い。みんな気持ちに通じあってやってきました。だからこの機運の高まりは、仲間と一緒にやってきましたおかげだと思っています。支えられませんでした。いろいろな意見があつて、ここまでくるには時間がかかったけど、今は逆にその時間を大事にしたいと思いません。そのおかげで、いろいろな方に伝えら

れる時間を与えられたと思っています。

私たちの活動に対しては「そつとしておいてあげて欲しい」という意見も一部にあります。それは、悩みを持った方や死を真剣に考えて遍路道を歩いている人たちの気持ちを察してのことだろうと思います。でも、だからこそなんです。だからこそ私は、「世界遺産へ」ということを伝えたい。世界遺産化を掲げたことでここまで注目を集めることになっているんです。

「死にたくなつたら、悩んだら四国に来なさいや」と伝えていくことが大事なんです。悩みを持った人たちに伝えるためにも世界遺産という大きなタイトル、アドバロンを掲げて「共に生きる」「お互い支えあう」という世界を伝えていくことが重要だと考えています。

そういう意味では、世界遺産化は、決して最終目的ではないのです。

★地域のへんろ文化について教えてください。

「お接待」と呼ばれるものがあります。歩いているお遍路さんに声をかけたり、地域で採れたものを分けてあげたり。ただそうすることに地域の人は特別な意識を持っていません。例えば、うちのふもとの集落は、毎年総出で、このお寺までの遍路道の草刈りをしてくれます。これ



はいつから続いているのかというのには誰も知らない。お寺から頼む事もない。その人たちはへんろ文化を守るんだとかそういう意識も全くない。ただ、お遍路さんが通れなくなったら困るだろう、道に迷ったら困るだろうとごくごく当たり前に草を刈ってくれています。

★暮らしの中に根付いているんですね

もちろん遍路道を歩いている人たち、あるいは「お接待」する側の人たちも、お遍路さんはお大師様の身代わりだという感覚がどこかに根付いていると思います。でも、おばあちゃんがお遍路さんを見たらこんなことしてたんだとか、あるいは

おばあちゃんが、孫や息子や嫁に「お遍路さんが托鉢に来たら、ここに米があるからそれをお渡ししなさいよ」と伝えたことが、なぜということではなく暮らしの一部になっっている。地域に「お接待」が根付いているんです。お遍路さんを通つたら、地域の方が協力してお遍路さんにお接待しようということが続けておられる地区もあるんです。

★世界遺産化に向けた運動を展開する一方で、四国遍路はほどほど良いとおっしゃっていますが

四国の人には申し訳ないけど、30年ほど前に四国に来たとき「とんでもない田舎に来たなあ」と思いました。でも、そのとんでもなさが人間らしいとも思えます。というのは、その生活が厳しいということです。豊かさを物やお金の物差して計ってみたら四国は確かに遅れてると言えます。でも、厳しい生活の中だからこそ、人間関係を大事にしているのです。私は、ほどほどというのとは人間との距離だと思えます。へんろ道の整備も共同で作業するから、お互いに顔の見える距離で情報交換が来ています。

それに、四国遍路がこうやって1000年、1200年続いてきているのは、日本のなかで四国遍路がトップじゃなかったからだと思うんです。これ

からも四国遍路を日本のトップにという風なことは考えないで欲しいなと思うんですよ。ほどほどの生き方、その価値観の中に人と人が繋がり、優しさが繋がってくるんじゃないかなと思います。

最近、よく思うのですが、幸せとは本来すごく主観的なものなんです。例えば「あなた幸せですか？」と聞いて「僕、幸せです」と答える。でも聞いた方は「僕、幸せなあなたはその収入で幸せなの」となったりする。例えば、不便なところに住んでいても「幸せだよ」という人もいる。都会ではいろんなものがすぐ身近にあるけれども、それが幸せなことかといったら、そういう人ばかりではないと思うんです。今の世の中の情報化は、どんどん均一化を進めています。本来主観的なはずの幸せも均一化されてしまう。本当はそうじゃないと思いません。客観的な幸せなんて私はないと思う。みんな客観的にあの家に住んだら幸せだ、こんな車に乗ったら幸せだ、こんな地位にいた



地域を結ぶ へんろ文化

建設中のへんろ小屋



へんろ、若
す。もち
だと思っ
が、大事
的繋がり
んな終身
すが、そ
いくつで
の人は80
は最高齢
ます。今
ともあり
に行くこ

★遺産化の会のこれからの展開を教えてください
決して大きな組織ではないし、特別な組織ではないだけに、もう身の程を知っているというかね。自分たちがそれこそ地域を歩きながら、遍路道に転がっている石を拾い上げてみたり、看板を直してみたり、等身大の自分のからだに合ったそういう運動をずっと続けていくということなんです。私は数人の仲間と「源流」というまちづくりグループを作っているけれども、その会には定年がありません。終身制、死ぬまでです。だから、会員のお葬式

ら幸せだと思っ
じゃないんです。

返りのために組織としては来るものは拒まない。若い人たちには大いに来てもらいたいと思います。でも、組織を大きくすることに特別に力を入れていくんだかということは全然思っていない。存在価値じゃないと思う、本当は。有名になる事でもない。自分がどう変わるかということなんです。例えば私は普段から「みなさんをもてなしたい」、「癒しだよ」ということを言っています。私が、それで、私自身が何が出来ているのかということが大切です。その問題を自分に突きつけることなんです。何もしないで、あれやれ、これやれとか、ほらみる転んだかとか、そういうことじゃなくてです。

だから、この運動をやっている自分は何が出来たのか。今日は、朝から生コンをこねてへんろ小屋の基礎を自分で作っています。そういうふうなことです。もてなしとつながりながらレストランに連れていくのは誰でも出来るんです。でも、やっぱりせっかく遠くから来たんだから、蕎麦を打ってみようかと思うこと、



仙遊寺でのシンポジウムの様子。手前「源流」のメンバー

それも私のもてなしだと思っ。そこに向けて自分がどういう風に変わっていくかが、問題なんです。

一人一人別に特別な人間でもない。今は世界遺産化へ向けての運動があります。この運動を続けることが大切です。そして自分たちも変わっていくこと。変わらなきゃいけないと思っています。